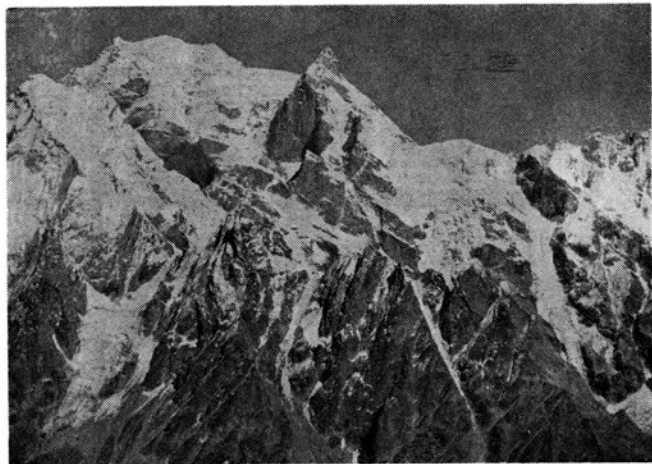




シックルムーンおよび6415m前衛峰(ブラマーI峰南東稜5400m地点から)

学生部第六次海外登山隊、インド・ヒマラヤ登山隊一九七九は、キシュトワール・ヒマラヤ、シックル・ムーン(六五七四m)・ブラマー(六四一六m)両山の登頂に成功いたしました。会員の皆様の暖かなご支援ありがとうございました。

最初目指したのは、『シックル・ムーン』、『小鎌の月』でした。九月二日からさっそく登山活動が始まりました。ブラマー氷河を四二〇〇m地点まで詰め、そこに九月四日、南東稜登攀のベースとなったCⅠを作りしました。そして、南東稜五六〇〇mのゴルに突き上げる懸垂氷河(以下ゴル氷

キシュトワールから 学生部インド・ヒマラヤ登山隊



1980年(昭和55年)
3月号(No.417)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- キシュトワールから
学生部インド・ヒマラヤ登山隊…(1)
第17回「この一本展」より(2)……(2)
チョモランマ登山隊壮行会……(3)
山スキーについて(下)(登坂信雄)……(4)
図書紹介……(5)
報告……(7)
科学研究委員会報告
(1) 燃焼工学と登山用コンロ
(2) チョモランマ登山隊の学術調査
熊本支部新年晩餐会
おふくろの味で(婦人懇談会)
東西南北……(7)
三水会便り
S・M・Cのヴェテランの歌
会務報告・ルーム日誌・会員移動(9)(11)
関西支部図書に関する小史……(10)
図書受入報告(図書委員会)……(11)
カット/芳野満彦・宮下啓三・松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

河、南東稜上のモンクス・ヘッド(五七五〇m)から派生する岩と雪のミックスしたリッジを辿り、五六〇〇mのゴルによりやうくことで抜け出て、CⅣを設けたのは、九月二十一日のことでした。ゴルからは、ブラマーI、ブラマーIIを中心とする氷と岩を縫った鋭い山容のブラマー山群が望めました。が、肝心のシックル・ムーンの頂は、標高六四一五mの前衛峰に隠れ、まだ見えないのです。そして、ゴルから前衛峰に続くリッジは、鋭く固い氷に覆われています。この前衛峰の乗っ越しがシックル・ムーン南東稜登攀の核心となりました。氷に足場を刻みザイルを固定する苦しいルートワークが続く、同時に下からの荷上げも粘り強く続けられました。

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

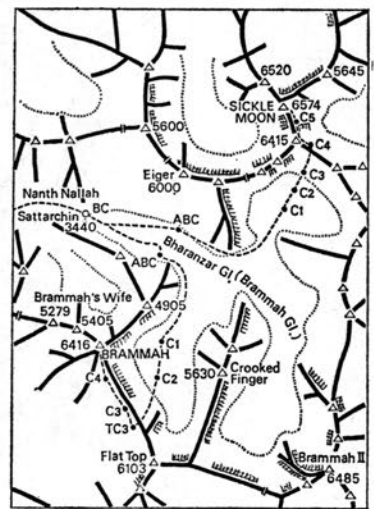
六日間の苦闘の末、前衛峰を乗っ越し、標高六二〇〇mのスノウ・プラトリーに九月二十八日アタック・キャンプを設けることができました。ここで初めてソフトな雪に覆われたドーム状のシックル・ムーンの頂を目前に仰ぎました。九月三十日、伝田、竹中、鈴木、駒宮、大林、芳賀、赤須の七名が快晴の中を登頂、翌十月一日、宮本、秋本、早川の三名も快晴の中を登頂。頂からは、遠くはカラコラムの山並、近くはヌン・クン、キシュトワール・ヒマラヤの峯の素晴らしい展望が開けていました。ここにシックル・ムーン南東稜の初登攀、全員登頂は、運よく果すことができました。

サッタールチンの標高が三四四〇m、シックル・ムーンのそれが六五七四m。それらの間の高差三千mあまり、登山日数三十五日の、シックル・ムーンの頂への長い道程でした。

サッタールチンでの四日間の休養を終え、十月十日、再びブラマー氷河を溯り、登山活動を始めました。次は、ブラマーI峰です。

・ブラマーへ

当初の計画では、未登の北東稜が登攀ルートでしたが、十月十一



(概念図)

トを辿り、十月十八日、南東稜五四〇〇地点に抜けてCⅢを設けました。標高五八〇〇のスノウ・ピークからジャンダルム群の基部までは、刃の先の様な

軟雪と岩のミックスした瘦せた恐ろしいリッジが続きました。

日、十二日の偵察の結果、予想外に長く難しいリッジであるため、食糧、登山日数の不足した私達には無理と判断し、南東稜に登攀ルートを変更しました。南東稜は、一九七二年、後年エヴェレスト南西壁の初登攀に成功したC・ポニントン、N・エスコートの英印合同パーティが初登攀した既登ルート、北東稜に比べ短くとは言え、けっして容易なルートではなかったのです。

南東稜の核心部は、標高五八五〇地点から六〇五〇地点に位置する鰐の歯の様に鋭い岩峰の連なるジャンダルム群でした。ポニントンらもこの突破には苦労した様です。

十月十三日から本格的な登山活動が始まりました。プラマー氷河南クームに入り十三日、四二〇〇地点にCⅠ建設、そして、セラック帯、クレバス帯、スノウ・プラトー、岩稜と変化に富んだル

翌十月二十三日、竹中、鈴木、駒宮の三名がルート工作にアタック・キャンプより地吹雪の中先行し、追って伝田、宮本、秋本、早川、芳賀の五名がCⅢを後にしました。竹中パーティが最後のザイル、ハーケンを使い登り着いたところ、そこが「天地を創造し維持

第十七回

この一本展より(2)

温泉周遊

中沢弘光(画) 共著
田山花袋(文)

(大正十一年 金星堂)

東の巻、西の巻の二冊から成り、展示したのは西の巻で、箱根伊豆以西の温泉を描く。各巻、画は色彩四枚とスケッチ百枚、文は二百余ページであるから、正しく共著である。

中沢は東美出身、黒田清輝門下の洋画家で、本書の色彩画にもその影響が見られる。帝室技芸員、文化功労者で昭和三十九年に九十一才で歿。石を置いた屋根の宿や一浴二銭の札を掛けた浴室その他、明治・大正時代の温泉浴客風景が、確かな筆致で表されている。

花袋は山の奥や峠や、へんびな土地に興味を持つ点に、私たちとの共通点がある。本書の中でも(特に東の巻に於て)到るところにそれが窺われて読んで楽しい。彼は紀行文を旅宿で書いていたと思われる。

(本書には美しい中沢筆の表紙がありました
が毀損しました) 川崎精雄

山に描く—絵と文 足立源一郎著

発行所 古今書院

発行年月日 昭和十四年九月二十九日

装幀 布表紙、箱付

肉筆素描淡彩画入 上製本

非売品

登臨行 上下二冊

文 藤木九三
絵 足立源一郎

発行所 相模書房

発行年月日 昭和十五年十二月二十八日

装幀 和紙本、布表紙、上下二冊箱入り

限定A版参拾部ノ内 第七番

上巻に藤木九三氏の肉筆文章入

下巻に足立源一郎氏の肉筆淡彩画入

両書とも文章に配するに山のスケッチが多数挿入され、まことに楽しい書物であり、私の秘本であります。私は両先生には御生前面識を載いた者です。

昨年の「この一本展」に両先生の書物が出品されたのを一入関心深く拝見しました。茲に在りし日の先生を偲び、この両書を私のこの一本として出品しました。

日本中央大山系横断記

ウエストン著 小島鳥水縮訳

ウオルター・ウエストンと小島鳥水の出会いが劇的なものであったことは、よく知られている。明治三十五年八月、鳥水と岡野金次郎は宿願の槍ヶ岳に登ったのち、「日本アルプスの登山と探検」に接したのだが、これが機縁となつて、横浜における交友がはじまり、やがて山岳会設立へとむすびつけてゆく。

この一連の歴史的経過については、鳥水のウエストン紹介文「日本の高山深谷を跋渉したる外国人及び其紀行」(「中学世界」明治三十七年九月)、その他の回想文にくわしい。そこでは明治三十六年の初めに、鳥水がウエストンの著作をふかく読みこんで「要点を翻訳し、仮綴本に作成していたことがつたえられていた。

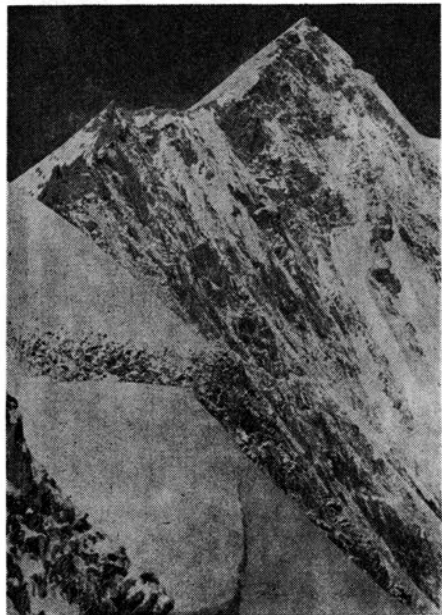
『小島鳥水全集』(全十三巻・別巻一)の編集に従事して、このたび、小島家にたつたその自筆稿本をみせていただくことができたので、紹介しておきたい。

2月15日(金)午後6時30分より
国電市ヶ谷駅近くの私学会館にお
いて、チョモランマ登山隊壮行会
が二百名ちかくの出席者を得て盛

チョモランマ登山隊壮行会

大におこなわれた。

本学会長である西堀栄三郎氏は
総隊長を兼ねた挨拶をおこない、
渡辺兵力隊長からは当日出席した



ブラマーI峰南東麓5400m地点からブラマーI
峰ジャンダルム群(左)を望む

する神の山」・「ブラマーI峰」
の頂でした。頂で伝田パーティと
合流、念願の全員登頂は果せませ
んでしたが、八名のメンバーは何
とか登頂することができました。
シックル・ムーンで高度馴化が
できていたせいか、ブラマーI峰
がコンパクトにまとまっていた山
であったせいか、実質登攀日数十
日間の、シックル・ムーンに比べ
、短かい頂への道程、速攻登山で
した。

*メンバー(年齢、所属)

隊長・伝田克彦(三六、東大スキ
ー山岳部OB)、隊員・竹中 昇
(二六、早大山岳部)、宮本明男
(二三、芝工大山岳部)、鈴木 章
(二五、東洋大山岳部)、駒宮博男
(二五、東大スキー山岳部)、秋本
友紀(二三、農大山岳部)、早川晃
生(二三、東洋大山岳部)、大林一
成(二三、農大山岳部OB)、芳賀
成明(二三、駒大山岳部OB)、医
療係・赤須孝之(二三、東大スキ
ー山岳部、医学部五年)、連絡将
校・ウダイ・サティ(三四、イン
ド陸軍)

(竹中 昇・記)

~~~~~「この一本展」より~~~~~

半紙判六十二丁からなるその自筆稿本の表紙  
には、横書きで「The Japanese Alps/Weaton」と  
あり、その下に「日本中央大山系横断記」ウエ  
ストン著小嶋生縮訳」としたためられている。  
末尾には「明治三十六年三月十五日訳了」とあ  
り、槍ヶ岳、穂高岳の写真がなぞったスケッチ  
四点がそえられている。本文は序章から第十六  
章におよび省略された章もある。各頁には、  
二葉についての簡単な説明がある。各頁には、  
鳥水独自の書体のこまかな文字でぎっしりと書  
きこまれている。彼自身、紙面狼藉をききはめ  
今となっては、自分でさえ読めない箇所もある  
程」と言っているが、この稿本の校訂作業をす  
すめていて、私は、ウェストンから多くのもの  
を学びとろうとする。若き日の鳥水のすさまじ  
い気魄を感じた。

## 「The Playground of Europe」

by Leslie Stephen

Longmans, Green and Co: 1871 初版

この自筆稿本は、破損はなはだしたため、コ  
ピーを作成して展覧に供することにいたしました。  
近藤信行

ステイブン(Leslie Stephen)のアルプスに  
於ける赫々たる活躍振りと名文は「先蹤者」に  
詳細に述べられているので、小生の如き弥次馬  
が本書の内容の詳細を述べる必要もないが、何  
分、初版である事と、扉にビルキントン(Charles  
Pilkington)の自筆のサインのある事が、書架  
に錦上添花をそえる一本となつて小生独り悦に入  
っている次第である。ガイドレス登山の先覚者  
として英国登山者の間に先鞭をつけたビルキン  
トンについても余計なオシャベリをする必要は

ないが、何れにしても相手にとって不足のない  
高名な登山家である。本書の装幀にしても既に  
出版以来百年を隔てた、手に触れただけでも家  
宝に値する一本である。

一八六五年、マッターホルンがウィンパーの  
一行によって初登頂された慶びの反面チャール  
ス、ハドソン他数名の墜落事故により、英国登  
山界に於ても漸く英国人のスイスに於ける活躍  
振りが目立つて来た矢先だけに、この事故によ  
って登山と云ふスポーツに対する一般人の風当  
りが強くなり、アルパインクラブの存続まで一  
時は危ぶまれる様な事にもなった。併し、その  
内にまたステイブんとカムーア(A.W. Moore)  
の様な古い先輩、強豪連の努力によって、元通  
りに登山を楽しむ連中が段々と増えて、中には  
このビルキントン兄弟の様な猛者のように、ガ  
イドレス登山の先鞭をつけた者も出て来て、高  
度の登山技術を要する登山が行われ、之がもつ  
と進展してマンメリーの様にシャモニーのエキ  
ューの極端に難しい針峰の初登攀をガイドレス  
で続々行い様になったのである。云わばこのビ  
ルキントン兄弟がガイドレス登山の火つけ役と  
なったとも云えるだろう。このビルキントンが  
アルパインクラブの大先輩、ステイブンの  
「Playground of Europe」を買ひ求め、巻頭に  
自らのSignを記し、書棚に座右の書として置  
き、且つ、読み耽ったのではないだろうか……  
と勝手に想像しながら書棚に置き、小生は益々  
この意義ある古典書の一つを珍重する次第であ  
る。

## 「The Picture in Tyrol and Elsewhere」

from a Family Sketch-Book

by E.F. Tuckett

Longmans, Green and Co: 1869 (初版1867)

本書は、アルプス登山の先覚者、タケット



隊員一人一人が紹介された。

このあと日山協を代表して山崎安治氏の挨拶があり、日中友好協会と報道関係者を代表して読売新聞社星野運動部長より激励の言葉と、今回の新しい報道体制に対する抱負が語られた。

つづいて司会の中島理事に指名を受けた藤山愛一郎氏(元外相)が介添の人の手をはなれ杖を片手に壇上に立たれたとき、隊員はじめ出席者一同は強い印象を与えられた。特に若き頃の藤山氏を知らぬ新しい年代の出席者たちは、一種とまどいに似たものをさえ覚えたようだ。

冒頭「私がどういふ者かわから



ないかもしれない」と氏はその雰囲気を感じられてか「私の会員番号は三九五です」と古い日本山岳会員であることをはっきりと証明され、「山に登らなくなったのだから会をやめればよいのだが、このようにいつまでもへばりついてきました」と日本山岳会との繋がりが単なる趣味としては片づけられないものであることを匂わせられ「嘉門次と共に槍・穂高に登りました」と言葉をつぎ、長年政界にあって日中友好に尽力され、今ここに藤山さんにとって忘れることのできなかつた山を通して、このことが実現される運びとなり、藤山さんの感慨は一般の想像を越えた大きなものであることを言葉の端々から窺わせ、そして「世界の中から特に日本山岳会が選ばれたことを承知し、日本の優秀な登山技術を中国の登山界にも提供し、頂上に達せればなおよいが、無理をせずその使命を全うして欲しい」としめくられた。

この挨拶のあと祝電の披露があり、名誉会員三田幸夫氏の音頭による乾杯、会食、交歓とつづき、8時30分に登山隊の壮途を祝し堀田弥一氏の音頭で万歳を唱え、西堀会長の閉会の辞、散会となった。

(岡沢記)

「この一本展」より

(Francis Fox Tuckett) の妹、E.F. Tuckett の著した絵図集、三冊の中の一冊であるが(他の二冊、即ち一冊は「How we spent the Summer: A Voyage in Zigzag」の二冊)は「Zigzagging amongst Dolomite」で何れも夫々一昨年昨年の「この一本展」に披露済、今回披露の本書は「一八六七年に出版されたものの第二版のもので、本書の内容は前記二冊と同じドロマテの中でもその道過した場所も違い、その地方、地方の人情、風俗、村民との談笑等が詳しく述べてあり、以前の二書が簡単な説明を附した絵図を主としたものであるのに比べて、本書は読み、且つ、絵図を鑑賞する一本である。例えばその一例として一八六六年九月、兄、タケットは岳友、ブラオン(George Forrest Browne)と共にイタリアとオーストリアの国境の Suldenthal と云う山村で国境の護衛兵にスパイに間違えられ、村の安宿に就寝中突然侵入して来た数人の兵士により小銃を眼前に突きつけられたが、さすがはタケット…従容として弁解する記述、A Night Adventure in Suldenthal」を読み、妹の絵図(本書の一六六頁)を見ると、護衛兵の



数人が「静かに…心配するな…」と声高に叫びつつ実弾入りの銃をつきつけている如何にも実感を伴った、巧妙に描かれた絵図がある。(當時はオーストリアとプロシアの戦争がたけなわであったから、国境の警戒が厳重であったのも無理ではないだろうけど…)。また、兄、タケットが同伴していた、当時アルプス一流の名ガイド、クリスチャン・アルマー(Cristian Almer)の案内手帳の「写し」(一八九六年出版「Christian Almer's Führer Buch」二百部限定、該書も先年の「この一本展」に披露済み)にタケットが、オーストリアとプロシアの戦争に妨げられて、予定の半分しか初登山が出来なかったのは残念だった…と記しているのを併読していると、興味シンシンとして仲々尽きる所を知らない楽しい絵図集である。右はホンの一例の内容説明に過ぎないが、小生、先年南会津の僻村の鉱泉宿で殺人強盗に間違えられ、あやうく駐在所に引張られそうになった椿事を思出し、このタケットの記述と絵図を一そう深く興味を以て見た次第である。

成瀬岩雄

山スキーについて (私の体験から) (下)

登坂信雄

・転倒を忌避する

ツアーの場合の滑降だが、転倒をひんぱんに繰返すようではツアーをやる資格はない。グレンデンの滑り方をそのまま山に適用しようとする処に無理が生ずるわけで、

ウエーデルン流では転ばない方が不思議な位だ。

昔は半制動と呼ぶ滑降法があった。平踏みをした山側の板に全体重を乗せ谷足の板で制動をかけたが滑る方法である。この滑り方だと斜滑降になりがちなのとグレン

デでは不必要ということ、日本スキー連盟ではすでに教程から削除してしまった。

しかし私は相も変らずいまだにこの技術を死守し押し通している。杖の使い方と半制動を最大限に活用し、重荷からの負担を防ぐと共に転倒防止を兼ねる訳だ。なんといいまでも転倒の回数を可能な限り少なくしないと山スキーは完

全と言えないからだ。むしろ私は制動以上に杖を活用し必ずその助けを借りるが、要は一本杖の用法と全く同一と思えばよい。

杖に体重をかけるのではなく、体重を山側に置く場合の支えの程度でよい。山側に杖を突けば自然と体は傾いてゆきその形のまま半制動で滑り出し回転時も杖の助けを借りる。回転が終わったところで谷側の杖は山側に移動すればよいが、雪質が悪いとか急斜のところは二本を一本にまとめ慎重に行動する。

寒いと金属製は突然に折れ修理が不能なので、弾力に勝り軽くて修理のきく竹製(トンキン竹)の杖を私は使っている。標準よりかなり長いものがよくリングの大きさにこだわらなければならない。

杖の持ち方が左山の場合は左手でリングから十五センチ位上方を握って下に押しつけ、右手は杖の取手を裏側から持ち上げるように握る。谷側の杖は手にはめたまままで引きずってゆけばよい。速力が出てきたら左手の握りをゆっくりとリングの方に下げてゆくとスキーは停止する。

山側の膝は直角に折り曲げ肩も山側に傾けながら板を平に踏むことと、谷足は山側の板から二十センチ位下方に位置させてV字型を作り、内側のエッジをやや立てながら半制動のまま右前方に押し出せばよい。右山に変わったら右手

で上から押し、左手は下から持ち上げて左山の場合とは全く反対となる。

馴れるまでは二本の杖を一本にまとめ左山は左へ右山なら右に杖を置き、杖の位置はバックケンより前に出ないようにすることだ。うまくゆかない時は直角に曲げた膝の上に杖をのせそこを中心に、杖の片方を山側に突き反対側を手で持ち上げて滑り出す。この場合腰高に注意し杖の長さの三分の二は山側に置くように心掛ける。



回転時が来たら全制動の回転動作に移り谷足を軸として半円を描くように山脚を思い切って押し出す。回転終了の直前山側の杖を谷側に持ち換えて右前方の雪面を突き回転の一助とする。また回転の直前アップヒルの気持で山側の板をいくぶん上方に向けたら体重を谷足に移し、右下方に肩を振るポデースウィングを加えるとさらに楽に回る。

私は絶対に安全な斜面でないとい

直滑降やウエーデンを使わず、大半は半制動に全制動を加えた滑り方に終始している。然し重荷での連ぞく滑降は相当に骨が折れるので、半制動を多用して長い斜行を持続し、方向を変える時だけ全制動を採用して脚部の疲労を防ぐ。狭い急斜ではストップと呼ぶ杖を使った急停止もやるし一杆以上の横滑りを試みることも珍らしくはない。

山中で拝見していると大半が深雪にひどく弱いようだ。首までのラッセルなら三、四度雪中で片方の板を動かしてからその足を前に踏み出し反対の足もこれに準じてゆく。こうした悪条件の日の降りはシールをつけたままシュプールを丹念に辿る以外方法はない。もしシュプールを離れて倒れると一人では起き上がれなくなる。

一応肩まで埋まっても滑れる条件の日は、まず両板の間隔を可能な限り幅広くとり、杖を一本にまとめてテールの方に突き、これに体重をのせてまっすぐに滑り降りる。両足の踵に強く力を入れて板のトップが見える位に板を立てつづけ、全身は完全に雪中に埋まりテールだけで滑るようにならないとスキーは走らない。

幸い腰程度の深雪でも山では必ず両足の間隔をできるだけ広げて滑らないとうまく走らずに転倒が多くなる。

どうも山スキーの連中はゲレン



## 図書紹介

スカートをはいた  
クライマーたち  
今井雄次 著

ワークマン夫妻のカラコラムの本などを見ると、ロング・スカートで氷河を行く夫人の写真が数多く載っている。当時の女性登山家にどのような人がいたか、その人たちはもともとロング・スカートでアルプスの針峯や氷河を攀じたのか、こんな疑問をもっていたのだが、これに答えてくれたのが本書で、五十年來の夫婦登山家であって愛書家でもある著者の含著が随所に現われた奥深い内容となっている。

第一章の「スカートをはいたクライマーたち」に登場するのは二十名ほどの女性であるが、登攀の様子と共に、登るときに身に着ける衣裳やもってゆく御馳走も詳しく紹介されている。ピクトリア朝時代はわが国の

明治・大正期のように、女性は家庭内にあるべきもの、とされていたのであるから長期の登山旅行は家庭的にも社会的にも容易なことではなく、これを押し切って山へ行くのは男まさりの反抗的な女性のように想像されるが、ここに出てくるどの人たちからも優しい、しとやかな印象を受けてしまう。

最終の第五章は「女性が書いた山の本」で五人の著作が紹介されている。なかでもフレッシュ・フィールド夫人が後年、大登山家となったわが子の元氣な登山ぶりを母親らしく書いて紹介はほほえましい。

第二、三、四章は「夫婦登山家の系譜」「女性だけのヒマラヤ」「日本女性隊の海外遠征」で、ほかに女性登山年表が巻末にある。

以上のような内容で、肩の凝らない本であるが、ミスプリントが目につくのが残念である。たとえば、ワークマン夫人は一九二五年一月二十七日、パリで亡くなり五十六歳であった、とあるが J.P. Farrar の追悼文では二十三日、カンヌで亡くなる、となっている。また Little Miller によると没年は六十六歳である。さらに「インディアン・アルプス」の著者名を前記の Miller は Nina Mazuchelli と

デ出身が大半のせい、か山の雪質や天候等に無関心のように、吹雪やガスの日ですら滑り出したらところかまわず猛烈にとばす面々が大半となった。しかし山にはクレパス、デブリ、雪庇、断崖、雪崩、滑落等がひそんでおり、とっさの場合に対処するにはスピードを常におさえる以外に対策はない。

正にこわいものなしの無慈悲だが、軽いけがや板の折損程度でも最悪時に直面してしまいうので、自分で自分を確実に守り抜ける防衛策をたてておく必要がある。

いづれにしても山スキーを指導する先生が皆無に近いので、冬山の鉄則はないがしろにされ、無統制きわまるツアーだけが横行するのはまことに遺憾である。終戦後細々ながら私なりに「山スキー学校」なるものを開いてきたが、大変に骨が折れるし難解の点もあつたりで、受講生一万人中大成したのは二、三人程度という貧弱さだ。私は毎年百日平均は山スキーに出かけるがその間の転倒は二回か三回だけで絶対に転ばないように心掛けている。これはスキー技が勝れているためではなく転倒が多いうとツアーは必ず失敗に終わったことを身をもって承知したからである。

どうも山屋は登路と山小屋を主体とした山登りに主点を置きがちである。スキーツアーですら登路が重視され、新ルートに対する研

究や努力はあまりおこなわれていない。

かつて山スキーの名所だった五色沼尻コースも登りの多いわり下りが少なく、このいやなルートをよくぞ何の不審も抱かず走破したものと不思議にさえ思えてくる。その後私の調査で同地帯に理想のコースを何本も発見した次第、ルートを守り抜くことも大切だが山の地形に精通すればこうした面も避けられた筈であつた。

鳥海山もスキーコースは登路の上下を繰返すのみだが、多少右か左にそれればすばらしいトレースが沢山に出てくる。更に大雪山、八甲田、八幡平となると導標完備で、それに頼る上下の繰返しのみとなり甚しく興味がそがれる。これでは観光旅行の有名なモデルコースを行く旅と山スキーが全く同意義となってしまう訳だ。



結果は何れの旅も型通りとなつてしまい、何等の新鮮味も湧かなくなつた。私は主旨として導標に頼らなければツアーをやれない向きは中止しなさいと言いたくなる。

登路も地元の人々が適当に歩いた路跡が後で採用されたものだけに、遠いとか曲りくねっていたり

でひどく無駄が多い。こうした路を辿って山頂に立つことだけが山登りだと考えたなら大変な誤りだと思ふ。

この点スキーは雪のあるところならどこにでも自由に進める利点があり、これを充分に生かして地形の精通に志していきたいものと思う。私は同じ山でも上り下りとも同一コースを二度と採用しないように心掛けているが、そのおかげか最短期で興味のつきないコースが次から次と生れてくる。

夏行かぬ山に冬は近づくの諺があるが、ここ二十年程私は必要以上に登路をつめる無雪期の山行は一回も行っていない。無雪期の山は平凡過ぎて興味や情熱を失なつてしまったためだが、命をかけたスキーの山旅の方が夏山よりも何倍も困難だし、あわせてもの凄く興味とスリルを呼び覚ましてくれるからである。

冬の富士は死神を背負うといわれるが山スキーと同様で、豊富な冬山のキャリアと雪に対する正確な技術とが必ず要求される。

シルも持たず板を背にツボ足で山頂に達し、サブザックの軽装で大滑降のみを望む。これではグレンドスキーを山まで延長した以外の何物でもない。事故を起した誰かが助けに来てくれるといつた安易な考え方なら、自信の持たない山スキーは絶対にプランしないことだ。(終)

つづっている。

一九七九年

蝸牛社刊

(今井正二)

## かもしか仙人

一乗鞍コロナ観測所物語一

早乙女緩次 著

冒頭に著者は「この本は今を去る三十年前、昭和二十四年秋、乗鞍摩利支天岳山頂に太陽コロナ観測所が出現する迄の関係者の労苦と……山に憑かれた数名の人物を登場させて綴ったドキュメント物語です」と語っている。従って文中の登場人物は皆実名で登場して来て居り、読ん

でいて懐かしい名前が随所に出て来るので、つい引きづられて読んでしまふといった本である。書名の「かもしか仙人」とは昭和二十四年乗鞍岳に太陽コロナ観測所を建設する頃、其の設置に、また生活指導に、八面六臂の大活躍をした、飛騨高山の森下博三氏に付けられた仇名であり、そしてこの人が初代仙人

であり、続いて二代目に松本の早乙女緩次氏、三代目に豊科の井口謙司氏と、三代にわたる

「かもしか仙人」を中心に、建設前後の労苦と、それから約十年にわたる山頂での単調な生活の踏み跡を、飛騨や信州の山里の素朴な情景や、戦後の食糧難、交通事情の悪さ等を織り混ぜながら物語は進行してゆく。そして、其の二代目仙人こそ著者自身なのである。

明るい筆の運びと、健康的な山の上の生活の模様を美しく書き進めて行く中に、戦後の荒んだ世相や、三千米の風雪の山頂に始めて観測所を作ると云う、探検にも似た壮舉を起こすに当っての苦勞が、同じ世代に生活した吾々の共感を呼び、昔日の不十分な装備での山行や、山で食糧確保に走り廻った頃の苦勞を懐しく思い起こしてくれ、何かほのぼのとした気持のよい読後感である。

また、随所に挿入されている十三葉の挿画は、著者の松本深志高校時代の友人で、彫刻家の横沢英一氏が画かれたもので、墨一色の印刷ではあるが、その重厚な画風はこの本の楽しさを一層引き立ててくれている。一九七九年九月十日発行 銀河書房(長野市稲葉上千田一四三一) B6判 二二四頁 定価一三〇〇円

(入沢郁夫)



## 報告

## 科学研究委員会報告

## (I) 燃焼工学と登山用コンロ

昭和五十四年十一月十六日当委員会では大きなものから小さなものという趣旨のもとに、日立製作所電力事業部の藤根勲氏と、オプティマス・ジャパンの片野一雄社長並びに伏見源治氏を招き、それぞれ「燃焼工学について」「登山用コンロ最近の進歩」と題する講演と実演をやった。

燃焼工学の講演では大型ボイラーを含む燃焼全般の物理化学や不完全燃焼、あるいは公害ガスの問題が取り上げられ、燃料として、ガソリンとプロパンの優秀性、ケロシンとブタンの安全性などが論ぜられた。登山用コンロではオプティマス33、123等今後発売予定の新機種についての実演も行われた。寒冷地使用や火力の調節、燃料の運搬具などなお問題があり、単に液燃よりガス化といった傾向だけで機種を決められないという説明もなされた。

## (II) チョモランマ登山隊の学術調査

昭和五十五年一月二十八日、委員会ではチョモランマ登山隊で学

術調査担当の京都大学地球物理院生横山宏太郎隊員を招き、講演会を開催した。要旨は次の通り。

今回は隊員数に余裕がなく、自身でも荷上げに協力し、それが一段落した後の期間を利用して調査を行うので、多くは期待できないが、一応氷河調査と気象観測の二項目を目指している。

A 氷河調査(主として東ロンブク氷河)

(1) 氷河形態と地形の写真測量



(2) 氷河の流動測定  
(3) 氷河の層構造記載と密度測定

## 熊本支部新年晩餐会

一月十二日(土)午後六時より熊本市下通り欧風レストラン「山

ボーリングによる直径七センチチ深さ十センチの水コアの採集  
(4) 降雪の採集  
(5) セラックスの標高測定

## B 気象観測

(1) 定点観測(ロンブク寺院ならびに東ロンブク氷河ABC)  
温度、湿度、風向・風速と気象情報

(2) 移動観測(現地時間六時、九時、十二時、十五時、十八時)  
天気、雲、風向・風速ならびに気温

A で得た資料の詳しい解析、たとえば $O_2$ と $O_3$ の同位元素比測定などは名古屋大学水圏科学研究所を中心に行われ、エヴェレスト南斜面との気候の差異などが研究される。

B のデータは登頂時の有力な一つの判断資料となる見込。

なお科学委員会ではチョモランマ登山隊帰国後、これらの調査に関する報告会を開く計画である。

出席者 渡辺兵力、沢井政信、渡辺正臣、中村純二、斎藤かつら、中村あや、遠藤慶太、大森弘一郎、三枝礼子、中沢光江

さんや、夫婦同伴会員も交えて二十一名の出席があった。

支部会員の晩餐会は東京の年次晩餐会にならって一昨年から始めているが、昨年末は何かと準備ができなくて、今年に入ってから開いた。一昨年は年末でしたが、新年に開いた方が気分が落ちつき、年頭の初顔合せにもなってよさそうに思う。今年から各人持ち寄りで「この一本展」を催したが、初めてにしてはなかなかの秘蔵品がそろった。しかし、これは限られ



## 三水会便り

## ・十二月現地集会

晩秋というのにいつまでも天気定まらず、山登りがっかりさせていたが、十二月の第二日曜日、高尾山は白銀の富士がくっきり見える上天気。暖冬のためまだちらほら未練げに残っている紅の葉が彩りを添える中を、家族とともども十六人が稲荷山コースを登り、城山ではいつもながら三水会の名コック坂本青年

た人数と持ち合せで、そう永くはつづくまいが、毎年つづけてみようと思っている。

その一部を紹介すると、今は38度線で隔てられている北緯、金剛山の各峰およびヴァリエーションルート登攀の想い出と、その当時の貴重なアルバム(奥野会員)阿蘇高岳鷲ガ峯開拓期の五高山岳部々報や、祖母山奥岳溪谷をはじめで紹介したしんづくし山岳会の「山行」とそれになつたる山と人の話(多田会員)

お手製の豚汁に舌つづみをうち、S女史の演ずる美容体操に笑いこぼるやら、たのしい初冬の日を過ごした。小学校の遠足以来何十年振りで登る人もいて感慨深そう。都心から一時間、僅か六〇〇メートルの高尾山も見平凡に見えて、四季それぞれ自然の移りかわりが美しく、展望の見事さと相俟って、みんなすっかり高尾山ファンになったよう。これからは是非、恒例山行としたいもの。陣馬までもどこまでも歩いて行きたい気持をおさえて、小仏峠から下って八王子へ出る。野猿峠の鎌田鳥山のろばた焼で美酒に酔って、欲談つきない忘年山行の幕となった。

参加者 坂本夫妻 菊地夫妻 高田親子 大野夫妻 高沢 杉山 隈部 広羽 斉藤

長野県松本市在住の古原和美氏  
夫人作成の木彫画・鹿島槍が岳  
(内田会員)

北極圏グリーンランド旅行時に  
入手した、セイウチの牙を加工し  
たエスキモーのお守り、およびア  
ザラシの皮でつくった珍しい雪目  
鏡などと、先進国の一方的な保護  
政策によって、却って崩壊しつつ  
あるエスキモーの生活の話(工藤  
会員)

昭和3年3月、二十九才で遭難  
した鬼才、大島亮吉氏の著書「山  
—紀行と随想—」を昭和22年秋に  
仙花紙の粗末な製本ながら、むさ  
ぼるように読了し、その後の登山  
の方向が決ったという話(本田会  
員)

82才の高令ながら、元気なその  
近況と血気さかん頃頃の山登りの  
回想(三谷会員)などだった。

会場になったレストラン「山小  
屋」は会員宮崎豊喜氏の経営であ  
り、熊本市の繁華街にあって、こ  
れまでも水車の回る山小屋風のレ  
ストランとして馴染深い店であっ  
たが、昨秋五階建ビルを建築し、  
ヨーロッパ風に新装オープンして  
いる。今回はこのお祝いも兼ねて  
行った。久しぶりに支部会員の顔  
がそろい、和やかな談笑とテーブ  
ルに盛られた珍らしい欧風料理と  
飲み物に舌鼓を打ち、時間のたつ  
のも忘れて散会した。

(出席者)(順不同) 西沢健一、  
本田誠也、奥野正亥、三谷孝一、

北(健) 齊藤(佳) 木村 浜田  
西関塚 (大野盛彦)

・新年初山行を大霧山で  
新年初山行を一月十九、二十

の両日、秩父・不動の湯を足場  
に、定峰峠・大霧山・羽新田峠の  
コースで実施した。  
当日はそよとの風もなく、春を  
思わせるポカポカ陽気で、ともす  
れば汗ばむほどであった。しかし

北側は新年早々の降雪が残ってお  
り、急坂でシリセードを楽しむ人  
もいた。  
山麓では梅が咲きはじめ、スミ  
レが可愛い顔をのぞかせている。  
小川町の名物「忠七めし」で最

後をしめくくる。  
参加者 坂倉登喜子、齊藤健  
治、片岡博、進藤波男、木村俊  
博、入沢郁夫、岩堀瑞子、荒野  
康子、高田真哉、他四名。  
(高田真哉)

## S・M・Cのヴェテランの歌

島田 巽

さる一月の図書委員会の折、  
「スコットランド山岳会のヴェ  
テランの歌」を仮訳して披露し  
たところ、「山」に載せるとい  
うので、あわてて手直しをした

が、あくまで仮訳である。トム・  
ペイティの詩にはパロディ風なの  
が多く、広く愛読されているよう  
だ。もちろんS・M・Cの公式の  
歌ではなく、ペイティには「アル

パイン・クラブ・ソング」という  
皮肉な歌もある。  
この歌詞が収められた「ある男  
の山」(One Man's Mountains)  
については「山」四〇一号で紹介  
したので、ここでは触れない。歌  
のなかの Buchaille はハイランド  
できびしい北壁が注目されている

ところ、L・A・Cとあるのは  
レディース・アルパイン・クラ  
ブの略。  
昨年末に頂戴した「名誉」へ  
の気はすかしさが、記憶にあっ  
たこの歌を、あるいは私に思い  
出させたのかも知れない……。



## S.M.C. のヴェテランの歌

(H. MacInnes 作 —Tom Patey が少し修正)  
曲は「Pinafore」のなかの The Admiral's Song

週末 わたしは町を出て  
仏頂面して 山へむかう  
わたしは頭も大丈夫 脚も丈夫で  
大きらいなのは あの町と 酔いどれども  
ごらんの通り 元気いっぱいだから  
S.M.C. のメンバーにされたのさ } くりかえし

Buchaille の岩場を 一日中わたしは登る  
有頂天のつぶやきが 君にも聞こえるだろう  
いやなカラスが飛ぶ ガレの上で  
わたしは力いっぱい 大きなステップをきざむ  
すごく大胆に登るので わたしは  
S.M.C. のメンバーにされたのさ } くりかえし

そのうち わたしの山登りの評判を聞いて  
はるか南から 女性がひとり やってきた  
わたしのために 料理をつくり あたためてくれた  
ひどい嵐のなかで みごとに確保もしてくれた  
この人は若くて きれいすぎたんで  
L.A.C. のメンバーにはなれなかった } くりかえし

だが 今のわたしは わが山やまを遠くで眺め  
手近の酒場へ よろめきこむ  
まず ウイスキーを生で ぐいっとやると  
わたしの話は あやしくなる  
さも もっともらしく 与太をとばすんだ  
わたしは S.M.C. の名誉会員だ……とね } くりかえし

(Tom Patey: One Man's Mountains より)



首藤宗利、馬場 猛、宮崎豊喜、石井久夫、多田隆峰、和仁古昇、工藤文昭、大木野徳敏、菊池更生、内田晴子、ほかに会員の奥さんなど非会員七名



おふくろの味で

——忘年会報告——

婦人懇談会

こんなうまいちらしを作るかあちゃんと結婚したかったよ、おにぎりいいね、この中華サラダうまいですゾー、すこいなあ、これで本当に千円なの？厚顔？紅顔の青年？淑女？達は、どの顔もニコニコ。前夜から徹夜の手作りの苦勞も疲勞も一べんにふき飛ばす思い。みるみる皿の品々が。さすが山で鍛えただけあって、それぞれの胃袋の中へたちまち消えて行く。

十二月十四日の忘年会は五十八名の参加者を得、折井副会長のご挨拶、島田大先輩の乾杯の音頭で開催、盛会でした。今回は、山は遠くにあるきの女房組でおふくろの味とせまった訳ですが、どうやら皆様のご満足を頂けた様でほんと安堵しました。久々のオーグションも、珍品・実用品が三十種におよび、高価なパイプやバッグま

で飛び出して活気を添えたようです。本当にありがとうございました。しかし不慣れのせい、台所をはい廻っていて血のめぐりが衰えていくせい、不備不手際の続出で開会は二十分おくれ。オーグションも内容不明瞭な御案内で申し訳ありませんでした。おくれはせながら紙面を借りて深くお詫び申しあげますとともに、御協力に心から感謝申しあげます。

・オーグション報告

御提出品数 四十八点

売上総金額 二九、二〇〇円

・御提出下さった皆様へお願い

①お名前②提出品名をお手数ながらルームまたは早川(急ぎ)まで御連絡下さい。

・売上金については 勝手ながら金額の80%を御提出者にお返しして頂きます。全額御寄附下さる場合は御好意に甘えさせて頂きます。

・参加者(当日の名簿記載順)  
山本、堀田、長沢、峰高、高橋(恩)、早川、小原、村井、飯野、折井、大塚、岡部、青木、村松、浜野、織田、下川、黒沢、尹、高沢、高田、山崎、千葉、斉藤、松永、松永、高橋(善)、杉山、中村、坂本、島田、久保、入沢、浜田、荒野、勝田、福井、宇津、神崎、山口、小林、田川、永川、斉藤(急)、木村、松田、岩堀、高橋(急)、黒石、

市村、小林、益田、広羽、田村、山田、宅間、斉藤、織内(以上五十八名)  
(早川記)

会務報告

2月理事会

(2月4日午後6時30分)

本会ルーム

・出席者 西堀会長、折井、渡辺各副会長、宮下、飯野、中川、山口、中村、鈴木、川上、岡沢、高橋、菅沢、嵯峨野 各理事、金坂、山崎、大塚、河野、小原、各評議員、片岡監事  
・委任 中島、小倉、高本、越田大森各理事、村井評議員、小原(急)監事

・審議事項

▽チョモランマ登山隊員の件

西堀総隊長以下報道隊員を含め41名とする。承認

▽「山岳」掲載の大沢宜彦氏の「リモへの遠い道」転載について

山梨県山岳連盟より創立30周年記念刊行物の掲載依頼ある。承認

▽JAC、読売新聞、日本テレビ三者契約について

西堀会長に一任する。了承

・報告事項

▽集委員会より

チョモランマ登山隊壮行会を2月15日私学会館で開催する。

▽青年懇談会より

1月30日にノルブギヤルツェ

ン氏らを囲み集会を開いた。  
▽図書委員会より  
新規購入本について意見、要望があれば連絡されたい。  
▽海外連絡委員会より  
UIAAに日本山岳協会が正式に会員になる旨、回答した。  
▽婦人懇談会より  
日本山岳女子ガールズヒマラヤ登山隊は4月下旬から6月下旬までの間にケダルナート(六九四〇)の登頂をめざす。隊員は高本信子隊長以下11名。

ルーム日誌

(55年1月)

11日(金) 理事会

16日(水) 三水会、婦人懇談会

17日(木) 高所登山委員会

21日(月) 図書委員会

22日(火) 自然保護委員会

23日(水) 日本大学集會

25日(金) 学生部指導委員会

28日(火) 山日記編集委員会

30日(水) 婦人懇談会

31日(木) 山研委員会、書評委員会

31日(木) 青年懇談会

今月の来室者三四六名

退会

一七七二 瀬名貞利

支部変更

五八〇三 鳥山正代(東海↓静岡)

「山が山であったころ

の山登りの話」

吉田 喜久治 著

昭54.12.15 木耳社刊

定価 3,300 円

(問合せ先)

〒116 荒川区東日暮里 6-59-14

TEL 03-891-5010

吉田 喜久治

・目次抜粋・

|            |         |
|------------|---------|
| 野呂川左股      | 1925    |
| 笛吹川西沢      | 1926    |
| 白萩川イケンタン   | 1928    |
| 袖沢・丸山岳・朝日岳 | 1930    |
| 立山川東大谷右股試登 | 1932    |
| 茂来山        | 1938    |
| 枯木山        | 1943    |
| 横根山        | 1943    |
| 西頸城の一郭     | 1954~57 |
| 白神岳        | 1958    |
| 裾花川濁川      | 1956~63 |

~80・夏は8月8日(金)~8月22日(金) 15日間

ソ連・カフカスの山旅

◎エルブルース山(5,633m)登頂(希望者)

◎夏山アルペンスキー

◎氷河と花の小旅行、その他多彩!

※カフカスはレーエルモントフなどロシア文学の郷里です。

=ソ連の山と旅の専門旅行社=

案内書呈 (株)日ソ旅行社 政府登録一般第98号  
電話 404-1751(代) 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-20-1  
担当:石元 昭 パークアベニュービル

## 関西支部・図書に関する小史(つづき)

昭和16年10月30日 関西支部図書備付拡充

支部蔵書充実の為、図書委員より著書寄贈のお願い状を各山岳書筆者に発送しておいたところ、早速次の通り寄贈を受け厚く御好意を謝した。

山の幸、登山家に必要なる救急処置、山の憶い出、奥羽の名山、樹林の山旅、ハイカーの怪、尾瀬と日光、モルゲンターレルの「山」、長白山、雪と闘う人々、有馬葛西遺稿集「歩み」、氷魂、尾瀬と南会津の山、又、木村敏吉氏より山岳美、上高地、山を行く、郷土会記録、祖母岳、大菩薩連嶺などの寄贈があった外、会報、部報、雑誌42種を各発行者より恵送してもらい書架を賑わした。

12月、大東亜戦争突入

昭和17年2月1日 阪急百貨店で高山深谷写真展をやるため、東京ルームで塚本理事より写真97枚預かる(富田健一氏)

11月に開催した冬季講座の分と共に朋文堂がこの山岳研究講座を2冊に纏めて出版してくれたが、北支派遣軍の兵隊から注文がくる等して世話人一同いささか肩身の広い思いをした。又、その出版による印税を2回にわたって東京本部へ寄附し「有難く受納」と本部より礼状を貰った。

昭和18年2月12日 山岳研究講座刊行に對し多くの会員より有難い便りがある。大島堅造氏、横有恒氏、守本文生氏、関根吉郎氏ら。初版は忽ち売り切れたが、再版は用紙難のため見込みなし

昭和18年、会報への支部執筆。通化便り(湯浅蔵)光徳小屋行(土田新一)陸軍美術協会展をみて、感に矣、対山館、思い出すことも、山岳兵下地のために(各西岡一雄)九州の山から、吉野から熊野へ(各川喜多社太郎)、また藤木九三氏著「登拝頌」が山と溪谷社より出た。克崎武夫著「蒙古横断」、田中薫著「氷河の山旅」も出た。

昭和19年 支部関係者の著作 藤木九三著「詩集山岳」朋文堂、加納一郎著(訳)「世界最悪の旅」朋文堂 田中薫著「東印度」目黒書店 桑原武夫著「回想の山々」七文書院。会報への寄稿としては、産業戦士と山(山田奈良雄)南方へ転じて(湯浅蔵)300円の山靴(土田新一)。会報は129より132迄刊行し21年4月の133号迄中絶した。

戦時下のルームには榎谷徹蔵氏寄贈のヒマラヤ全図の掛地図を正面の壁に掲げその左右に横さんのアイガー稜登攀の写真、中原氏寄贈のゴルナーグラート周辺の写真、入口右側の壁面には足立源一郎氏のグリンデルワルト写生図がかかっていた。(3月24日東京常務役員会に於て「関西支部より山岳研究講座第2巻印税中より500円送附ありたる件につき厚く謝意を表しこれを基金に繰り入れることとす」との決議あり。)

19年空襲が次第に多くなったので愈々図書疎開を考えねばならなくなってきた。東京でもこの年早くから図書疎開を役員会の議題にし乍ら却々纏らない内に翌年虎ノ門ルームが鳥有に帰するの悲境をみた。

昭和20年2月28日 藤木九三、永楽、富田がルームで会談、話は空襲対策と書物疎開の事のみ。評議員の加賀正太郎氏の山崎の別荘に御無理をお願いしに行ったりしたが折悪しく不在だった。

6月1日 午前9時40分より11時まで、B29 400機により大阪市内が空襲され、貯蓄ビル南側に落下せる焼夷弾の一つがルームの硝子窓を破って室内に落下した。長岡書記の机を焼くに至るが図書の焼失は免れる。

多くの図書、借用中の外国文献、山岳全冊の健在が無性に嬉しかった(富田)。戦後、別宮氏より「山岳」の一部を頂い

たが、空襲の汚れがついたままでも当時を偲び感慨にたえない。

昭和21年 終戦、通貨に新円発行

6月9日 本部長・松方、副会長 藤島(敏)、三田氏に決定。

昭和22年 本部会報は138, 139, 140号の3号を発行したに止まる。日本山岳会は内部的改革を行い組織の拡大を図り、広く同好の士の協力を求めることになる。会の活動単位として各地に支部を設け、地方毎に会の事業部門の活動を徹底させていく事になった。従来のJAC 関西支部は一応解消し、新しい支部規定による組織が考慮される時期にたち至った。支部設置準備委員会が誕生する。

「山」は東京より出版、36頁で8円位で発定予定。

1月17日 JAC ルームで林氏の援助で洋書の整理をする。

3月7日 大阪朝日講堂にて新支部発会式

約100名出席。支部長浅井東一氏

4月1日 JAC の大先達高野鷹蔵氏の岳友加藤栄氏が山岳、スキー等の書籍を譲って下さるというので、大分沢山選り出させて頂き、その目録は東京に送る。東京では戦後松方氏らが大部分集めていたので、本部へは送らなかった。支部蔵書に加えられている筈。

5月18日 京都の加藤栄氏宅を富田、大橋(秀一)で訪問、図書のお礼を申し上げたあと明治時代の山の話の伺う。

12月7日 藤木、中原、諏訪多、富田で榎谷徹蔵邸(前評議員)を叩門。遺された数多くの立派なスケッチ入り登山日誌(A5判300頁位のもの35冊程)を拝見。余りの見事さに一同感嘆。

昭和33年5月「関西支部報」誕生。第1号発行される。目標を隔月刊行とし一年6回を出す決心(津田周二支部長)担当、阿部和行、大島輝夫氏  
32年12月25日 図書 マウンテンワールド、アルパイン・ジャーナル等購入(図書委員 中尾正武、三沢一三、田淵邦彦)

昭和34年 図書委員(兼文書)津田康祐、

大賀寿二、三沢一三、田淵邦彦

昭和35年 委員 大賀寿二、野村哲也、田淵邦彦、中野 明

6月15日 朝日放送刊行「日本の山々」頒布について検討。関西学院大学山岳部より竹田吉文氏著「インカの山をさぐる」、関西学生山岳連盟より「時報」16, 17号「報告第10号1960年」寄贈

昭和36年 京都府立大学山岳部より、「部報第1号1960年」石坂昭二郎氏より「ヒマルチュリ日記」ベースボール・マガジン社刊、同志社大学山岳部より「CIよりアビ」四ツ切カラー写真類縁入り、藤木高嶺氏より「笠ヶ岳より穂高」畳一畳大黒写真、神戸商科大学体育会山岳部より部報「稜線」1960年寄贈図書(文書)委員 大賀寿二、中野昭、岸田権二、田淵邦彦、仲西政一郎

支部購入の外国図書

○The Alpine Journal Vol. LXIV, Nov. 1959, No. 299

○The Alpine Journal Vol. LXV, May 1960, No. 300

○The Alpine Journal Vol. LXV, Nov. 1960, No. 301

○The Alpine Journal Vol. LXVI, May 1961, No. 302

○The Geographical Journal Vol. CXXVII, Part 1, Mar. 1961

○The Geographical Journal Vol. CXXVII, Part 2, June, 1961

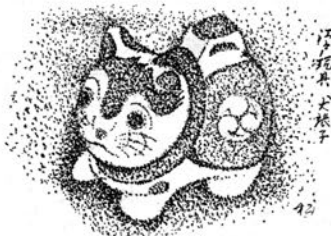
(支部報11, 阿部委員記)

昭和36年 支部長 水野祥太郎

昭和37年 文書図書 大賀寿二、岸田権二

支部購入の外国図書

○The Mountain World 1960/61



# 図書受入報告

図書委員会

## 昭和54年7月受入図書

1. 長谷川恒男著「北壁に舞う」集英社 1979 (版元寄贈)
2. 熊谷樵著「女ひとり氷河を滑る」鎌倉書房 1979 (版元寄贈)
3. 新潟拓本研究會「越佐のいしぶみ」学生書房 1979 (著者寄贈)
4. 京都府山岳連盟「京都北山からヒマラヤへ」1979 (著者寄贈)
5. 楠目高明著「上高地逍遙雜記」草思社 1979 (版元寄贈)
6. 今井雄二著「スカートをはいたクライマーたち」蝸牛社 1979 (著者寄贈)
7. Österreichischen und Deutschen Alpenverein, "Alpenvereins-Jahrbuch 1978" (版元寄贈)
8. 孫慶錫著「綜合登山技術百科」成文閣 1978 (著者寄贈)

## 昭和54年8月受入図書

1. 牧野茂著「山の基礎知識手帳」山と溪谷社 昭54 (版元寄贈)
2. 沢登り研究会編・著「ルート図集1・沢登り100選」草文社 昭53 (版元寄贈)
3. 小泉共司監「ルート図集2・東京周辺の沢」草文社 昭54 (版元寄贈)
4. 遠藤甲太著「山と死者たち」草文社 昭54 (版元寄贈)
5. 日本山岳写真集團「北アルプス」実業之日本社 昭54 (版元寄贈)
6. 橋本広著「山旅の記念に・私の8mm映画ナレーション集」窓出版会 昭54 (著者寄贈)

珠穆朗瑪峰(チヨモランマ)登山隊への  
郵便物の宛先は次の通り

中華人民共和國西蔵自治区  
協喀兒革命委員会転交  
日本登山隊  
某様

所要日数は航空便で

船便は 10~14日  
約一ヶ月

料金(航空便)

書状 10gを越える 10g  
葉書 70円 100円

(船便)

書状 40円 20gまで  
葉書 50gまで 60円  
100gまで 100円  
(珠穆朗瑪峰登山隊事務局)

ごとに60円増

(チヨモランマ隊より編集宛)

出版に際しましてはいろいろとお世話になりました。おかげさまでチベットの下に荒涼とした風景が広がっています。三〇〇mの高地ですが全員元気です。(2月27日)

昭和五十五年三月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビニウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(加)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂